



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	小序
Author(s)	鈴木, 栄太郎
Description	『鈴木栄太郎著作集6（国民社会学原理ノート）』を出版した際のソースとなった原稿である（同書内の言及による）。 資料作成年不明（システムの制約のため、発行日には没年を入力した）
Issue Date	1966
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/77284
Type	manuscript
File Information	ix_X056_01.pdf



序

◎これほ私の遺稿となす

ついでに書かれたので

あら、書かへた一冊か相あるに類してはけ

これが一先づ

これに上乗す

直つて書かへた

魂つて感しがす。り。これ一冊

これが

成りたる。せめて生かへて

書いて自伝

あらは心は生かへて。うは余り

録会

あらうか。中書指となつて

分らない

んは目に。か。不安かあ。生かへて

にわつて

昭和二十五年六月に北大病に退院

北海道にあらむ

昭和二十五年

△それでは、私はあつておると思ふ。△それを案を得た。

水書

し、それ以来、私の研究は皆都市

化によるものに集中した。その中の一つは、都市の発展の速さ、

その北に、これより、都市は毎年、

その下の見下、次に、都市は、

も、取柄、この五十一年度の清

部で、私の研究は、都市化の

伝、その金、都市化の、

ここに、都市化の、都市化の、

又それ

④ よう清書をす。五を甲斐を感

たれはさす。阿病にも其(2)事あり

⑤ よう破定をい。よう清書をす。又(1)杯

いあえから。私は係神のた又(1)的た

却の九推用から。放免させ(1)し(1)る(1)事(1)を(1)

北大より都教授の嘆かい底落かな

けれは私の破定。私の金庫中(1)は完成

しあかつた。もの(1)あり。これは男(1)の(1)像(1)的(1)

これに記して感謝の意を素した(1)へ(1)

たの

五年か、七年かの清和なうまに少しばかり

世故をかへたものがある

北に東の事強いていふ

私はこの事をすくは病したければな

いなかた年禁にたの清和安んのか執事

準備

作動にお金したあま

報団

公報の命令や儀禮的な一ちの事

か、放るし

金か、際か、し、せあ、る、を、ゆ、こ、し、し、ら、つ、て、あ

い、ま、た、義、理、か、し、し、新、は、ま、清、和、丈、

せめ

たは
すは
いし
もの
に
さ
る
た
は
や
を
て
ち
る
と
た

~~するに
 よう
 松の毛神を
 宝如し~~

子為

七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十
 二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十
 三十一
 三十二
 三十三
 三十四
 三十五
 三十六
 三十七
 三十八
 三十九
 四十
 四十一
 四十二
 四十三
 四十四
 四十五
 四十六
 四十七
 四十八
 四十九
 五十
 五十一
 五十二
 五十三
 五十四
 五十五
 五十六
 五十七
 五十八
 五十九
 六十
 六十一
 六十二
 六十三
 六十四
 六十五
 六十六
 六十七
 六十八
 六十九
 七十
 七十一
 七十二
 七十三
 七十四
 七十五
 七十六
 七十七
 七十八
 七十九
 八十
 八十一
 八十二
 八十三
 八十四
 八十五
 八十六
 八十七
 八十八
 八十九
 九十
 九十一
 九十二
 九十三
 九十四
 九十五
 九十六
 九十七
 九十八
 九十九
 一百

此のい
 う詩
 義を
 作
 する
 こと
 は

4

定成

すゝまては
死んで生
きては死
んで生

と
思
つ
た

投じしに

この一巻を著者孫へ託したるは、
 成化元年

九、
いふと、
黒い
たが、
何故
あんな
もの

八五

4
10
67
(

第

2
人
たり
レ

2
+

子

定成

子又出里て五中五生りて片に

上梓する女
 女中さんのは
 夢の形を
 ちやいあ。

① アメリカでは澤山の社会がある澤山の
分野に分けて此の希望と自己をいかに
立ち働いて研究しつゝ居る。

序文の一部

No.

本が、都市経済学の研究に志したのは
 終戦直後、私が東京大学に在りて、C・Eの指導を
 課の顧問をして居た。アメリカの経済学
 者やに現存する人類学書とアメリカの
 経済学書の現状について話した。この
 以の通りである。その時知り得たのは
 アメリカでは各分野の経済学、即ち農村
 経済学や都市経済学、教育経済学、犯罪
 経済学や軍需経済学など、多くの分野に及ぶ。税
 金の徴収が一つである。税に關する

本が、都市経済学、教育経済学、
 犯罪経済学、軍需経済学、税金の徴収

したる概念
を整理しなす

流れて見ても正確と思へる字はあからである。

の題字

10.

正確なる程度に同する。然るに
 この領域内限りにおいては、
 現れたるものに満足する。又の
 大將にならなさい。格に誰しか
 の現象は、行は浸透し、何くても
 あり。そして、その時、社会を
 分節が、その時、社会を分節
 する。か、その時、社会を分節
 大將の思想が、その時、社会を分節

まふた

たすかふ。そんな考

あ。

に思ひあつた事

それか。日本の此はやけう。日本の
そとに。このみ。最も木。石。破。破。
外。人の。左。の。現。況。か。し。ん。な。に。は。ん
い。ん。場。合。し。決。し。て。ま。え。さ。い。な。い。す。を
よく知。ん。新。三。年。子。知。新。に。片。を
自。身。自。身。と。い。は。知。新。の。研。究。に
お。い。て。は。決。し。て。推。考。に。関。く。ち。し。得。た。り

思つて居るけれど、やはり私はエト
ンでしかなかつた。いまだに夢い
たのであふ。

私は新都市の調子で、若くはな
かもし、精神的に不安定なところ
かと思つてゐる。たが、これと
アメリカの学問とも話して、同
にその希望が低くなつた。そ
れより、話す機会のあつた、
武蔵野、横山、故郷など、都

と云ふのも

も頂が一後臺さんからしてはなく

私はこの臨書で御座るもの研究に専念して来た。
 この研究が完成されたと云ふ者へおまはなと、おしり
 中村君の御座るもの研究も更に深めて行く事かゝるも
 近縁の研究分野としての都市研究なるは私にとては
 前にかは他處の口には感ぜられずなかつた。
 (見えなかつた事である。驚である。)

然し愈々種々の都市社会学の研究もに専念しやうと
 一歩のそこを足を入れようとして全く他口に来た心地である。

明治の都市社会学の発展と研究の進歩

者の中に都府に於てを執事するを
 給しむ。さうなれば矢は鮎につるをば衆
 中のてある。せうとうする。し出まなひ。
 けれどもおは前都府は~~ア~~外(口)に
 ア人うかにむは。都府に於ての業績を
 今し。その^{執事}の^的にむ。し。考へがう
 には。に^{執事}の^的にむ。し。考へがう
 も。ゆうかにし。し。た。た。う。う。う。
 と。是。た。の。て。あ。つ。た。

私女北火に於てのは昭和二年九月

癸病の
市の
同
下
論
文
に
あ
る。

ねはこの年の十二月に北に來てから、
 の海文として、都市の新聞に
 を草した。新聞、健民、
 地方新聞の為に書いたのである。その
 は次の年の三月号に掲載された。あ
 が、丁存氏の以て、病床に倒れ、
 療養生活に入つた。その病床の掲載さ
 した新聞は、
 何事もなく、
 どこかに消えてしまった。

小さな地方

昭和二十三年

と云ふ雑誌はほんの一時あの当時又出版
されな雑誌はついにそのとき止む。都市に
ついで南に都市社会をあらわす。都市は
かつた以上の語をとりしねにほなつかしい。更
である。病院

私の心の中

は都市社会生活のすゝめ。私は物に二る性
質である。都市社会をあらわす。都市は
わが心は厚ぼく。病院から出
てかうはアナウカの都市社会をあらわす。

⑩

奥井後太郎氏の大作を讀みしめくを讀するとして
比書の優れな内容に感服して矢先に残稿を
の著書と都²⁸市^{26.5}の地政学を研究し
相つて述べられた。新加坡を加へ
は要はないと思つて研究はついでといふ本
を書く意味はなくなつたと思つて可いであらう。

本をよみあさしとしに農お記なるもの
 空の時にまさうてあつて様々最り敷模め
 わさい帯り果絶な都市を調査して
 そ二に都市の構造の縮図をいれよう
 と思つたがけねえその希望は実現せ
 られず暗く中でもさくの時代な思ひこ
 りもしろこうなれば私の理想は見え
 なく行くばかりで都市の複雑な
 あらわれはあまふる同僚業鑑に不満
 をいつたりはいふくす豊かには深かき一級

丁卯年同知在見世世
見世世世

都系に同す。漢書左の史記にヤいし。(10)

はかりあつて。けれど私の病氣は生死を
 従来すゝねな重態をくりかへして居る。
 この十数日間は都市の社会構造に同ず。
 足解^{あしと}解^と出^で来^きた^た時^{とき}にはもう死んでしまひ
 思^{おも}つた^た。その^{その}病^{びやう}の^の好^{この}年^{ねん}に^に研^{けん}究^{きう}は^は俄^がかに^に突^{とつ}破^ぱは
 左^{ひだり}の^の病^{びやう}氣^きと^と接^{てつ}す^すよ^{よく}近^きん^ただ。サレ勉強^{べんきやう}しては
 又^{また}倒^{たふ}れ^る。病^{びやう}床^と生^な活^{かつ}が^が相^ああ^らつ^てい^はは^はえ^えん
 左^{ひだり}と^とい^いふ^ふ。又^{また}教^{きやう}導^{どう}して^{して}何^{なん}の^のか^かして^{して}又^{また}
 倒^{たふ}れ^る。さ^さう^うい^いふ^ふの^のう^うま^まに^にく^くり^りか^かへ^へし^て居^ゐる。
 この一^{いっ}ふ^ふな^なを^を成^{なり}す^すれ^はも^もう^う死^しん^でい^い

ふいふはと何なる思ふ、たゞいふう、
 十年夏から化学療法を同様の及、
 一年春からばもう色々の危険性、
 あらうなくなつた。

よくもこの病をいふ、よくもこの一書が
 完成したものの、
 中では、この本は中々、
 違ひないから、正しく、
 一トの乱雑な行文を、
 すよ、
 自分

て書いた原稿に出版せられたるは夢の存在
 草と云つて片よ

松田氏の社会の発展の研究として

社会の発展の研究の発展に資する

るに著者の著る様に感じを

述べんか、私は社会の発展の研究は

社会生活の発展の基本的な動向の

理解と云ふ事に最高位の傑作を

を期はするものなりと考へるに非ざる

べしと云ふなり、そのより社会の発展の

調査

なる、うへはない。

研究をいふことは予盾である。既に思入

り、^{これ}自身では根據ありきである。

私の都市研究は都市生活に於ける

都市生活の基本的構造と基本形態

的要素の相互関係を究明する

由のこころである。これは、^{（もし）}研究の目的である。

これは、^{（もし）}研究の目的である。

私は、^{（もし）}研究の目的である。

外の先兆事によるものか、抑もに

読者

し、うへはない。

あゝ
うん
うん

あゝうんは月夜にさあ、然し私の研
究には假し力をなした。月のほは北大に於け
る私の研究の^{ゆゑ}あつた。私の
この研究は全く^{その}私の協力して
達成したものである。私と彼とに
たゞより私と彼とにやんたう。本
多のこの研究は、^多彼は私に
助けてくれた。あゝうんは、
私の二人の~~研究~~助平と彼とに
富山^多君が私の研究に
助けてくれた。

なり、私自身か、試みより、しつと
 活潑に正確に調査してくれなかつたら
 この研究は、として、成就出来なかつた、
 ストライヤ中の工場に、押込んで、労資
 双方の、関係の、力の、線の、確記す。
 為の調査、の、如きは、私自身、が、供与
 健康、であつても、果して、なる、か、わかれぬ、
 あり、

序文

我が国には、都市能く字に圖こは

既に奥井後太郎磯村英一両兄の大著
か出て今更のて、新か、屋上屋を重ぬは、都
は、^も思つて、けれ、^も都市の数字に
記、^も字を、^も通、^も用、^も好、^も余、^も地、^も大、^も殊、^もな
^も今、^もと、^も残、^もり、^もた、^もの、^も下、^も都、^も市、^もの、^も記、^も字、^もを、^も得、^もる、^も所、^も
^も記、^も字、^もを、^も能、^もく、^も行、^もた、^もの、^もて、^もある、^も。此、^も書、^も五、^も兩、^も
大著の補記の役目になつてゐる。か、^も書、^もれ、^もば
幸、^もで、^もある、^も。又、^も新、^もい、^も世、^も代、^もの、^も人、^も口、^もの、^も大、^もき、^も
な、^も発、^も展、^もの、^もお、^もん、^も市、^もの、^も推、^も進、^もを、^もそ、^もの、^も役、^もに、^もな、^もつ、^も
か、^も書、^もれ、^もば、^もよ、^もろ、^もこ、^もい、^もて、^もある、^も。

朝鮮に任せて居る朝鮮の人の
書いた者様や何かの書か
北常においかに書いてあるに
朝鮮には字を書くか
人かよの字を書いて居る
知らない人が多いうる
では又を書く書道は一つの
の文は実同的に用いられて
して詩をよんだり書か
へてよめたり

故にそれによりて
教養の高さ

日本で

を人に与すものであつて、八百屋の束の帯を
か記憶のための記録として書きおこして片々文
字の使い方は全然異なつてゐる。日本
人は漢字を書くのに下手ではあるが、知し皆
知つて片々限りの文字は実生活に活用して
居る。それなくしては生活が支えられな
い。漢字を生活に活用して居る。
取つて凡そを同じくするものもそれを教える
の為に貴族達がいやうな如く自身につけ
た時代もあり、たゞあうが少しでもそれを

今日では大抵にあらうは

（し）造り、
活用

しやうとして居る。

実生活に活用するものと仲ある。人々
 のお飾りとして唐床の書道や牡丹の
 花の図等を写すのは、^{その}その意は、^{その}その
 ために文藝が人生に活用される^{もの}は、^{その}その
 用を^{その}その^{その}また^{その}た^{その}け^{その}にな^{その}つ^{その}ては^{その}お^{その}か^{その}し^{その}た^{その}。
 是^{その}の^{その}は^{その}同^{その}が^{その}貴^{その}族^{その}者^{その}の^{その}教^{その}育^{その}の^{その}看^{その}察^{その}に^{その}
 用^{その}を^{その}れ^{その}て^{その}来^{その}た^{その}為^{その}に^{その}さ^{その}う^{その}な^{その}つ^{その}た^{その}の^{その}て^{その}あ^{その}う^{その}か。
 同^{その}と^{その}互^{その}へ^{その}は^{その}抑^{その}束^{その}な^{その}の^{その}高^{その}い^{その}し^{その}の^{その}を^{その}尊^{その}し^{その}とし
 其^{その}の^{その}れ^{その}を^{その}絶^{その}對^{その}的^{その}の^{その}もの^{その}とし^{その}て^{その}来^{その}た。^{その}同^{その}は^{その}お^{その}飾^{その}り
 て^{その}あ^{その}う^{その}か^{その}う^{その}其^{その}の^{その}を^{その}絶^{その}對^{その}的^{その}の^{その}もの^{その}とし^{その}て^{その}来^{その}た。^{その}絶^{その}對^{その}

東洋の階層社会に生れた一つの社会がどうなつたのである。

的であるとして現象の富い多き批判や
其の第一のものかよいか
か東洋の第一は富い多き批判や

その絶対と化すは如何と問はれぬ中
平等とあるが絶対無批判のものとは
此に於ては如何にか

生活の各方面に於ける知識や技術を
適用し得る方面に於ける知識や技術を
常識的な判断によりよくなく何程
かしてその方面に於ける考えを整理し
て見たかよいか場合がある。

その間は君子の世の生活は庶民の世の生活は如何に
庶民の世の生活は如何に

新は古い層の如く家の時代から来た
 子に云ふ考へ方^かは私^{わたくし}の生活の名義
 而^{しか}に云ひつゝ^{けられ}所^{ところ}は或る表面の一
 部^ぶを今現代すればそれである
 何もかも今現代されねばならぬといふ
 なく新の生活のすべ^へく^くなる^{こと}を^し要^ひす
 総^{そう}じて^{して}目的^{てき}の^の調査^さし^て見^みて^て考へ^かへ^へる^{こと}
 といふ。史^しが^がある^{こと}を^しう^うし^て考へ^かへ^へる^{こと}
 今^{いま}代^{だい}した^{した}我^{われ}ら^らの^の生活^{生活}は^は言^いへ^ない。
 私^{わたくし}は^は新^{しん}の^の乙^{おつ}しの^の建^{けん}築^{ちく}が^があ^ある^{こと}

又私等の生活を正しくして之を
 にも合理的な社会研究は必要である。
 了。我は常になつたつてある。うゝたつ
 大つたのうゝ家の上に出る判断の基
 礎をいふ立論であるが、之を
 科学的な立論である。又之を生活の
 仕方である。うゝは五々六六である。
 その五々六六もいふが、現世の生活は如何
 に不正曲されて居るのか。

情勢を捉へて革命はいやうなうけとし

原始の時代の如く
思はれ、
考へ方なとはもう一度
松本
的に考へ直して思はねばならぬ。